



2017

出雲文化
活用プロ
ジェクト

手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業
—平成29年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書—



まえがき	1
平成二十九年度 チラシ	2
手銭記念館所蔵資料を活用したアウトリーチ	
料理ワークショップ「初夏の茶懷石」	4
大社 能を知る集い「能と神楽く古代の息吹く」	6
小学校での能楽ワークショップ「能・狂言を体験してみよう」	6
器を直そう！〜金継ぎ教室〜	7
連続講座「古典への招待く和歌を中心に」	8
連続講演会「江戸を学ぶ」	10
アンケート集計	12
館外展示	14
平成二十九年度企画展	16
総括	20

出雲文化活用プロジェクトについて

出雲大社にほど近く、神迎の道に面して居を構える手銭家は、江戸時代前期に大社へ移り住み、酒造業の傍ら御用商などさまざまな商売を営むとともに、江戸時代中期から明治維新までの間、長く大年寄、御用宿などを仰せ付かつてきた。このような事情もあり手銭家には、絵画、工芸、刀剣刀装具等の美術資料と生活用具等の民俗資料、未整理の資料も含めた膨大な古典籍と文書類が残されている。

手銭記念館は、手銭家から寄贈された約五百点の美術資料を基に平成五年に開館した私立美術館で、館蔵資料および手銭家所蔵資料を利用した企画展をこれまで継続しておこなってきた。

また、島根大学法文学部山陰研究センターと手銭記念館は、平成十七年から手銭家の蔵書に関する調査を継続しておこなっており、公開可能な資料から順次、島根大学附属図書館のデジタルアーカイブ上で公開している。

このような展示と調査の過程で、記念館館蔵資料と手銭家に残されている大量の資料のいずれも、江戸中期から後期にかけての大社町に関する様々な側面を詳しく記録し伝える貴重な資料群であることが、改めて分かってきた。

そこで平成二十六年に、調査研究と資料の活用をより一層すすめるために、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館、手銭記念館が連携して『出雲文化活用プロジェクト』を発足させた。

このプロジェクトは、江戸時代の歴史、社会、文化を研究する上で大きな意味を持つと考えられる様々な伝来資料を整理研究・解説・公開することによって、江戸時代の大社における生活文化や文芸活動などの様相を広く地域市民と共有し、また、大社町の町おこしや振興への新たな材料や付加価値を提供することを目的としている。

初年度の平成二十六年度は「文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館

創造活動支援事業」の助成を受け、『萬日記』と文芸資料のデジタル化、特別企画展「江戸力―手銭家蔵書から見る出雲の文芸―」を開催した。

二年目となる平成二十七年からは「文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を受け、ワークショップ等を通じて、江戸期の出雲地方においてどのような生活文化が育まれ享受されていたかを、より多角的に公開し体験してもらうことを試みている。

今年度(平成二十九年)度は、所蔵資料を活用したワークショップ、連続講座、企画展に関連つけた連続講演会をおこなった。これらの事業では、所蔵資料から見えてくる出雲の文化について、より深く、より広く知っていただくよう努めた。平成二十八年度に続き平成二十九年度も、島根大学附属図書館、島根県立古代出雲歴史博物館での館外展示をおこない、他機関との連携、アウトリーチ活動の強化を試みた。

また、これまで山陰研究センターと共におこなってきた蔵書資料調査や資料解説は継続しておこなった。

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

公益財団法人手銭記念館

島根大学法文学部山陰研究センター

島根大学附属図書館

出雲市大社町の手銭家には江戸時代の出雲文化を知る手がかりとなる資料が多く残っています。これらの資料を読み解き、活用・発信することを目的として、出雲文化活用プロジェクトが2014年に始まりました。本年も、様々なイベントを通してその魅力をお伝えしていきたいと思っています。

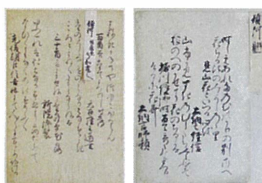
連続講座

古典への招待 ～和歌を中心に～[全5回]

和歌研究が専門の野本瑠美先生を講師にお迎えし、かなの読み方、和歌の歴史と楽しみ方、鑑賞のこつなどを楽しく教えていただく講座を今年も行います。テキストは、手銭記念館が所蔵する古筆や書籍です。伝来してきた本や古筆を通して、文芸活動を楽しんだ江戸時代の人々と心が通い合うような時間を過ごしていただければと思います。

- 8月4日[金] 第1回 「古今集」と「新古今集」
 8月25日[金] 第2回 題詠と恋の歌
 9月29日[金] 第3回 「枕草子」を楽しむために
 10月27日[金] 第4回 和歌のお手本「草庵和歌集」
 11月24日[金] 第5回 杵築文学あれこれ～和歌で楽しむ杵築文学～

- 開催場所：手銭家和室
- 時間：13時半～15時半
- 定員：毎回30名
- 参加費：各回500円(資料代)
- 講師：野本 瑠美(島根大学法文学部准教授)



主催：出雲文化プロジェクト(公益財団法人手銭記念館/島根大学付属図書館/島根大学法文学部山崎研究センター)
 助成：平成29年度地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業



出雲総合芸術文化祭



料理ワークショップ 初夏の茶懐石

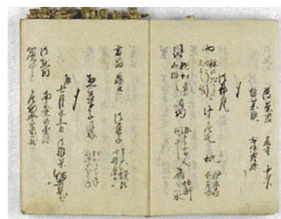
毎回好評をいただく江戸時代の料理を再現し試食するワークショップ。今回は、当館が所蔵する不昧公の茶会記から、いくつかの料理を選んで献立を組み立てました。手銭家に伝来する器もお楽しみください。

2017年 6月21日[水]

- 集合時間：【調理からの参加】10時 【試食のみ】12時半(試食開始は13時から)
 - 開催場所：大社コミュニティセンター
 - 参加費：2,000円(材料費)
 - 定員：調理 10名 試食 約20名
 - 料理指導：安藤 登(日本料理 登わ)
- ※調理に参加される方はエプロンをご持参ください。
 使い慣れた包丁があればご持参ください。



※写真は前回の調理例です。

手銭記念館
TEZEN MUSEUM

www.tezenmuseum.com

出雲文化 活用プロ ジェクト

IZUMO BUNKA KATSUYOU

PROJECT 2017

www.tezenmuseum.com

2017

大社能を知る集い

能と神楽 ～古代の息吹～

神々に捧げる「神楽」は出雲ではとても身近な芸能ですが、能・狂言も、天岩戸で神様達が舞った神楽が源流だという説があるそうです。神話につながる地名や文物が今も残る出雲の地で、能・狂言の世界から「神楽」や「古事記」を覗き、体験してみましょう。世界が広がる、予測不可能、ドキドキのワークショップです。

2017年 7月1日[土] 15時～17時半頃

- 開催場所: 手銭記念館第二展示室
- 定員: 30名
- 参加費: 600円(記念館入館料として)
- 講師:

安田 登(能楽師 下掛宝生流ウキ方)

槻宅 聡(能楽師 森田流笛方)

奥津 健太郎(能楽師 和泉流狂言方)



館外展示

館外展示1

「江戸力 一献立色々」

2017年 6月3日[土]～25日[日]

- 場所: 島根大学附属図書館

館外展示2

「手銭家資料と大社の芸能(仮)」

2017年 9月20日[水]～10月16日[月]

- 場所: 島根県立古代出雲歴史博物館 常設展示室

器を直そう! ～金継ぎ教室～ [全6回]

割れたり欠けたりした大切な器・元に戻せたらと思っている方は多いのではないでしょうか。漆を使って欠けや割れを直してみましょう。

5月10日[水] 10時～12時 第1回 「漆の不思議な力とその扱い」
修復作品確認

6月14日[水] 10時～11時 第2回 接合

7月12日[水] 10時～11時 第3回 表面を調える

7月28日[金] 10時～11時 第4回 漆を塗る

8月9日[水] 10時～11時 第5回 色漆(金漆)をつける

9月13日[水] 10時～11時 第6回 磨いて完成

- 開催場所: 手銭家和室
- 定員: 10名
- 参加費: 5,000円(材料費 初回にいただきます)
- 指導: 三宅 博士(伝統技術再生工房「方丈庵」代表)

連続講演会 江戸を学ぶ

さまざまな伝来資料も参考にしながら、江戸時代の生活や文化についてお話しいただく連続講演会です。

- 開催場所: 手銭家和室
- 定員: 各40名
- 参加費: 600円(記念館入館料として)

第一回 不昧流茶室をめぐる近代数寄者の普請道楽

2017年 12月2日[土] 13時半～15時半

- 講師: 田野倉 徹也(数寄屋建築家、田野倉建築事務所代表)

第二回 江戸時代の旅 一大社参詣と札所巡りー

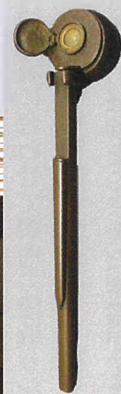
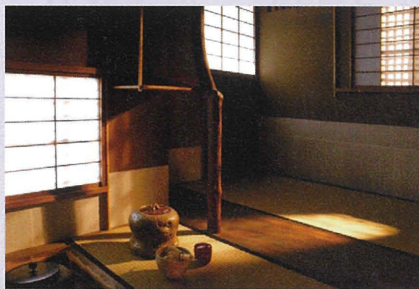
2018年 1月27日[土] 13時半～15時半

- 講師: 岡 宏三(島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員)

第三回 俳人の紀行

2018年 2月17日[土] 13時半～15時半

- 講師: 伊藤 善隆(立正大学文学部准教授)



参加申込み・問い合わせ

TEL/FAX: 0853-53-2000 E-mail: info@tezenmuseum.com
お名前とお電話番号、参加ご希望のイベントをお知らせください。



手銭記念館

TEZEN MUSEUM

開館時間: 9:00～16:30

休館日: 火曜日(火曜日が祝日の場合は翌日) 12月21日～1月5日、展示替期間中

入館料: 大人600円(500円)、高校生以下400円(300円) ※()内は20名以上の団体料金

〒699-0751 島根県出雲市大社町杵築西2450-1 電話/FAX: 0853-53-2000 E-mail: info@tezenmuseum.com



《料理ワークショップ 「初夏の茶懐石」》

開催日 六月二十一日

十時～十四時

講師 安藤 登(日本料理 登わ)

会場 大社コミュニティセンター

参加者 調理 十名

試食 三十一名

《献立》

向付 鯛作り身／いり酒 しそ

汁 唐瓜／江戸甘味噌

椀盛 竹の子

ますのふわふわ

引物 鮑和煮／山椒

取肴 鮎風干／たで酢

火取り芋

香の物 胡瓜／奈良漬



料理ワークショップは例年秋に行っていたが、これまで取り上げていない初夏の献立を再現、試食しようと考え、今回は六月の開催とした。

献立は所蔵する『大円庵様御一代御茶事記』(松江藩七代藩主松平治郷の茶会を記した江戸時代後期の茶会記)から選ぶこととし、日本料理ならではの食材や調理法を出来るだけ知っていたくことを考えながら探したが、この条件を満たし、食材も揃うという会はなかなかなく、結局、「卯閏 六月三日」「午五月十九日」「四月廿三日」の三回の料理を組み合わせ、て献立をたてた。

今回の特徴として、以下の点をあげたい。

- ・「蓼酢」、「いり酒」を作ったこと
- ・下処理が難しそうなことから敬遠しがちな、冬瓜や鮑を使ったこと
- ・江戸時代の料理を具体的に体験できると思われる「ますのふわふわ」を取り上げた事

・「江戸甘味噌」を使った事

・手銭家に伝来する江戸時代の器を用いたこと

「ますのふわふわ」は何より名前にインパクトがあり取り上げたものの、調理法がはつきりわからず、江戸の料理本を読み漁ることとなった。

色々と調べた結果、スフレのように出来たてを供する事が何よりも大事であることがわかり、配膳のタイミングに気を配る、茶懐石らしい緊張感を味わう事もできた。

江戸甘味噌は、江戸で作られていた早出の味噌。糶を多く使い、当時の味噌の中では贅沢なものだったらしい。

不味の茶会記は江戸大崎で催された茶会の記録であり、懐石の献立の中には麦味噌、五斗味噌など味噌の種類をわざわざ付記した部分もある。そこで基本的には江戸甘味噌が使われていたのではないかと考え、用いることにした。

天候不良のため鯛や鮑が揃うかどうかぎりぎりまでわからないなど、江戸時代と変わらないような不安定な状態だったが、なんとか食材を揃えて当日を迎えられた。

あらかじめ会場に合わせて調理の段取りを決めておいたこと、分量書きは出来るだけ調べて当日参加者へお渡ししたこと、昨年と同じスタッフだったことなど、これまでの経験をふまえた準備ができたことで、問題なく時間通りに進められた。



感想には、家で作ってみたい、活用したい、次年度以降も継続して欲しい、また参加したいという意見が多くあった。

また、手銭家伝来の器には、漆器の良さを感じた、漆器を使ってみたい、器で料理がより引き立つことを感じたなどの意見が寄せられ、日本の伝統的な食と器の良さを体験していただくというこちらの意図が伝わったと手応えを感じている。

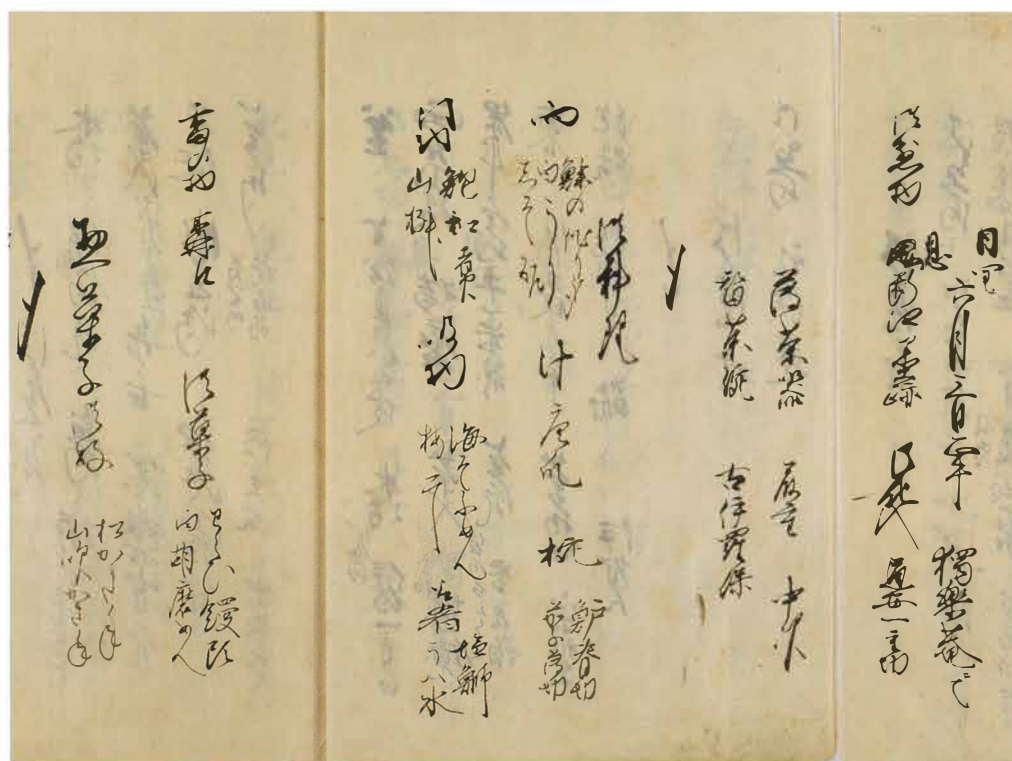
二〇一八年は不昧公没後二百年にあたるということで、記念事業を主催する松江市観光課から数人が、参考にと視察にみえた。

それ以外にも、茶会記や、これまでの料理ワークショップについて、問い合わせや取材が増えつつある。

来年度以降も継続すべき事業であり、様々に応用できる可能性のある事業だと考える。



アウトリーチ 料理ワークショップ



《大社 能を知る集い 「能と神楽」 古代の息吹》

講師 安田 登(能楽師 下掛宝生流ワキ方)

槻宅 聡(能楽師 森田流笛方)

奥津 健太郎(能楽師 和泉流狂言方)

開催日 七月一日

十五時～十七時半

会場 手銭記念館第二展示室

参加者 二十七名

現代では高尚で難解な芸能と思われがちな能楽を、江戸時代のようにもつと身近に、自由に楽しむための入り口になれば、という趣旨で行っている能楽ワークショップ。

今回は、『古事記』から「天岩戸神話」、「スサノオによる八岐大蛇退治」という出雲と関わりの深い話を取り上げ、能、狂言の歴史、共通点と相違点についての解説から始まり、神楽はどうして生まれたのか、「面」とはどういう力を持つのか、言葉はどのように生まれ、どのような意味を孕んでいるのかなど、漢字、彼岸と此岸、古代と現代、人に対する芸能と神に対する芸能、など様々な要素のお話へと話は拡がり、いつもの事ながら、盛り沢山な内容となった。

最後は狂言で舞われる神楽の唱歌や謡曲『大蛇』の一節などを、実際に節を付けて謡った。

昨年までは平日の午後に開催していたが、今回は土曜日の午後三時からの開催としたところ、これまでに較べて若い方達の参加が随分増えた。

続きを聞きたい、継続開催を望む、といった感想を多くいただいております、今後、開催時間などを工夫し継続する事で、より多くの方達に参加していただく事が可能だという感触を得ている。



《小学校での能楽ワークショップ 能・狂言を体験してみよう！》

講師 安田 登(能楽師 下掛宝生流ワキ方)

奥津 健太郎(能楽師 和泉流狂言方)

開催日 十月十二日 午前

参加者 三十八名(6年生)

大社小学校

開催日 十月十三日 午後

参加者 九名(6年生)

遙堪小学校

開催日 十月十三日 午前

参加者 七十一名(6年生)

荒木小学校

大社町内の小学校に出向き、6年生を対象に行っているワークショップ。能や狂言の歴史、特徴、表現などを学びながら、能楽師の声や所作、音を身体で感じてもらうだけでなく、実際に動き声を出し、体験している。

神楽舞でおこなわれる「唱歌」と足拍子、能・狂言それぞれの喜怒哀楽の表現をやってみた。また、狂言「盆山」を鑑賞した。

先生からは、学習発表会での生徒の発声が良くなった、続けて欲しい、といった感想をいただいた。



大社小学校



遙堪小学校



荒木小学校

《器を直そう！～金継ぎ教室～》(全六回)

講師 三宅 博士(伝統技術再生工房「方丈庵」代表)

開催日 五月九日～九月二十八日

十時～十二時

会場 手銭家和室

参加者 十名

「金継ぎ」は、漆の特性を活用して器の割れや欠けを補修し、その疵を金粉で覆う工芸品の修繕技法として、古くから行われてきた。特に茶の湯では、陶磁器に施された金継ぎ自体を見所として楽しむという、日本独自といえる美意識も発達している。

講座では、皆さんに直したい器を持ち寄ってもらい、約三ヶ月かけて、疵や欠けを補い、金粉を蒔き、研ぎ上げるところまでおこなった。

漆に接するのが初めての方がほとんどで、注意はしていたものかぶれる方もあった。また、持ち寄った器や破損の状態が様々で、材質、破損状態(割れ、欠け、ひびなど)によってそれぞれ補修の仕方が違い、講師に負担をかけることになった。募集の時点で、もう少し絞っておくべきであり、運営側の認識の甘さが出てしまった。大きな反省点である。

期間中、企画展で陶磁器を展示していたのだが、参加した皆さんは展示作品の補修に目をひかれるようになったようで、金継ぎのうまさや、直し方の意図を考えるなど、美術館での楽しみ方が増えた、という意見もいただいた。

物を大事にするという気持ちと同時に、思わぬ所に美を見つける楽しみ方も知っていただけたようである。



少人数での開催ということもありすぐに定員に達したため、募集締め切り後、また講座修了後にも、「知っていたら参加したかった」「次回はいつからか」などの問い合わせを多くいただいた。

希望者はかなりありそうだが、継続するのであれば、前述の反省点をふまえてどのような形でやっていくのか、しっかり計画を立てて臨む必要がある。

《連続講座 古典への招待》和歌を中心に》(全五回)

講師 野本 瑠美(島根大学法文学部准教授)

開催日 八月四日～十一月二十四日

十三時半～十五時半

会場 手銭家和室

昨年に続き、手銭記念館が所蔵する古典籍、古筆切、美術資料などをテキストに用いた連続講座を開催した。

この講座は、所蔵資料を用いることで、所蔵資料や、江戸時代の大社における文芸活動について発信することも目的としている。

本年度は和歌について学ぶことに重点を置いて資料を選んだ。

変体仮名や崩し字の読み方、歌集や短冊、懐紙での表記の仕方、解釈や鑑賞のポイントは勿論、歌集の成り立ちや楽しみ方、資料が持つ文学史中の意義についてもなるべく触れるように心がけ、全体を通して和歌文学の歴史と流れについても知っていただければと考えた。

昨年の講座では、時間内に画像資料を解説する時間を多めに取ったため、毎回予定した内容の途中で時間が来てしまうことが大きな反省点だったが、今年は、次回使用する画像資料を先に配布してあらかじめ予習してもらおうようにしたことで、講座の内容をより充実させることが出来たと考える。

また、手銭家資料の意義や価値を知らせることが出来たことも大きな成果である。

資料準備の過程で新たな知見や疑問点をいくつか得たので、これらについては今後、調



査研究を進めていく。

■第一回 《八月四日》

『古今集』と『新古今集』

参加者 二十五名

天皇や上皇の命によつて編纂された勅撰歌集である『古今集』と『新古今集』をテキストに、季節(暦)と天皇の関係、勅撰集の構成、ちようど三百年の時を隔てて編まれた『古今集』と『新古今集』からうかがえる、主題の選択、感覚や表現など和歌の様々な変化について学ぶ。

【使用した資料】

○『古今和歌集』(江戸時代)

○『新古今和歌集』(江戸時代)

■第二回 《八月二十五日》

題詠と恋の歌

参加者 二十八名

平安末期頃から次第に盛んになっていった、歌題に即して歌を詠む「題詠」。勅撰集では主に男性によつて詠まれていた「恋」の歌に注目し、題詠とはどういうものかを学ぶ。

【使用した資料】

○『手鑑』より 古今和歌集切(伝為氏筆)／金葉和歌集切(伝為相筆)

○『新版絵入伊勢物語 上』(江戸時代)

○『新古今和歌集』(江戸時代)

■第三回《九月二十一日》

『枕草子』を楽しむために

参加者 二十四名



江戸時代に出版された北村季吟による注釈書『枕草子春曙抄』をテキストに、和歌が詠まれる状況、「春は曙」という一言が生んだ、時代を揺さぶる新たな視点、当時の宮中と政治の複雑な関係について学ぶ。

【使用した資料】

○『枕草子春曙抄』(江戸時代前期)

○『百人一首折帖』(近衛信尹筆 江戸時代前期)

○『三十六歌仙画帖』(江戸時代中期)

■第四回《十一月四日》

和歌の御手本―『草庵和歌集』―

参加者 十八名

昨年も取り上げた『草庵和歌集』を本年も取り上げ、題詠と本歌取りの名手頼阿が詠んだ歌と本歌を比べながら、本歌取りの和歌の鑑賞のポイントを学ぶ。

【使用した資料】

○『草庵和歌集』

○『三十六歌仙画帖』(江戸時代中期)

○『三十六歌仙屏風』(江戸時代前～中期)

○『百人一首』(近衛信尹筆 江戸時代前期)

■第五回《十一月二十四日》

杵築文学あれこれ―和歌で楽しむ杵築文学―

参加者 十九名

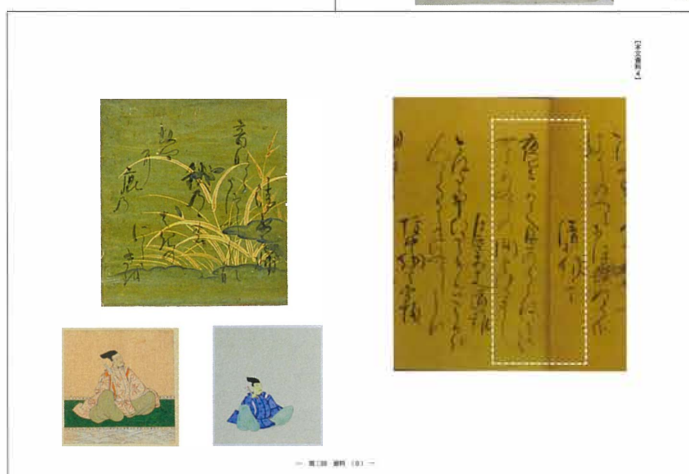
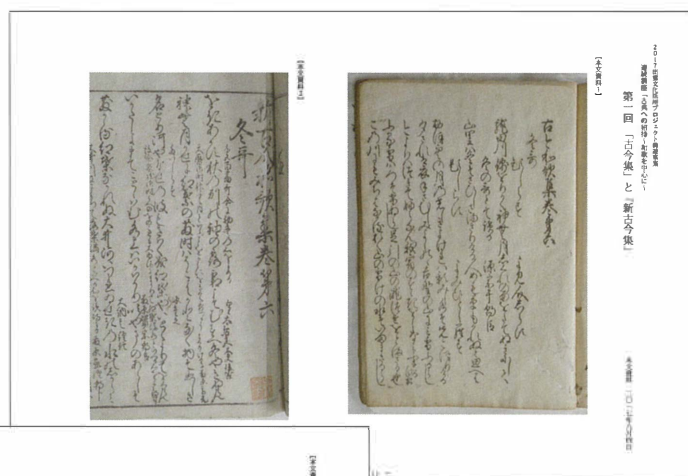
手銭さの子による和歌の詠草や様々な消息写しなどをテキストに用い、これまで講座で取り上げた資料や内容が杵築文学の中でどのように活かされているか、知っていたら、地元の人々の残した散らし書きを読んでもみる。

【使用した資料】



- 和歌詠草、和歌短冊(手銭さの子、他)
- 『朝宵草』(手銭さの子)
- 『消息写し』(手銭さの子他)

いずれも江戸時代後期



《連続講演会 「江戸を学ぶ」》

企画展と連動したテーマで行う連続講演会

■第一回 不昧流茶室を巡る近代数寄者の普請道楽

日時 十二月二日

十三時半～十五時半

講師 田野倉 徹也(田野倉建築事務所代表)

参加者 六十名

企画展「茶の湯の愉しみ」に合わせ、茶室についてお話しいただいた。

まず、江戸時代の建築規制の厳しさと、解体して組み立てる「移築」が可能という、日本建築ならではの特徵についてお話があり、そこから、様々な茶室の間取りや工夫、茶室からうかがえる亭主(普請した人)の茶に対する考え方へと進んだ。

大正六年には、不昧公の没後百年を迎え盛大な茶道イベントが行われているが、大正時代の数寄者達は、不昧公に触発され、様々な茶室を建てている。これらの茶室について、多くのスライドを用い、特徴や見所を示してくださった。

江戸時代の建築事情、茶室の見所、不昧公の思わぬ所への影響など、現代にも繋がる新鮮な内容だった。

不昧流茶道を熱心に学んでいた手銭家十代白三郎は、昭和十年代に一疊台中板の茶室を建てているが、不昧公と大正時代の数寄者達に触発されたことも、大きかったのではないだろうか。

講演会の後には、手銭家の茶室も公開され、参加した皆さんは興味深そうに、茶室や庭を見学していた。



■第二回 大社参詣と札所巡り

日時 平成三十年一月二十七日

講師 岡 宏三(島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員)

参加者 二十四名

江戸時代の旅をテーマにした企画展「出雲今昔Ⅱ 萬日記から見る江戸時代」に関連した講演会。

江戸時代にも、出雲大社へは全国から多くの参詣者が訪れていた。そんな大社の中世から近世までの様子を、お話しいただいた。

室町時代から江戸時代にいたる複数の古絵図と文書からは、港湾や土地の整備などにより家々が増え、商業が盛んになることで町が発展していく様子がよく分かった。

江戸時代に入って大社の知名度が上がった理由として、「日本勸化」と言われる幕府公認の募金活動と、御師の精力的な普及活動があつたこと、受け入れる側も、特別拝観や大々的な春秋の祭礼、外部から訪れた参拝客限定の富くじを行うなど、大社を中心に町を挙げて営業努力を重ねたことが具体的な資料から紹介され、現代でも参考になりそうなお話も多く、興味深かった。

また、大社を訪れた人々の日記からは、江戸時代の人々にとって大社参詣とはどのようなものだったのか、庶民はどのように旅を楽しんだのかが、きいきと伝わってきた。

最後に、江戸時代後期に大流行した「出雲札所巡り」が紹介された。

大がかりなお伊勢参りや旅行と違い、一週間程度で周辺の寺社を巡る「出雲札所巡り」は、手軽に「旅」を感じることができるとするプチ旅行である。遠方への旅から近場で旅気分を楽しむ札所巡りまで、様々な旅をそれぞれ楽しん



でいた、江戸時代の生活や人々の思いを知ることの出来る講演会だった。

■第三回 俳人の紀行

日時 二月十七日

講師 伊藤 善隆(立正大学文学部准教授)

参加者 十七名

江戸時代の旅をテーマにした企画展「出雲今昔Ⅱ 萬日記から見る江戸時代」に関連した講演会。

企画展では、江戸時代に手銭家を訪れたと思われる俳人の短冊、大社の住人が書いた俳諧紀行『いそ枕』、所蔵する『おくのほそ道』など俳諧紀行も、展示している。そこで、俳人の紀行というテーマで、お話しいただいた。

俳諧と旅には切っても切れない深い繋がりがある、と誰もが思うのは、『おくのほそ道』という作品ゆえなのではないだろうか。

講演会では、まず俳諧紀行の特徴と形式について説明があり、ついで『おくのほそ道』の成り立ちと意義についてのお話へと進んだ。

実際の旅とそこで生まれた句を書き連ねたノンフィクションだと思っていた『おくのほそ道』だが、実は虚構の逸話や句も挟み込まれている事、芭蕉は完成まで五年をかけ充分に推敲を重ね、完成形の筆写本を常に所持していたが、刊行されたのは没後九年も経ってからだったことなど、知らない事ばかりで興味深く、芭蕉がこの旅で得たものの大きさを、この紀行文に込めた並々ならぬ思いも知ることができた。

一方、俳諧紀行の刊行と俳人の旅には、門人の獲得や俳流の拡大、自己アピールといった実利的な面もあるということで、江戸時代中期の門人獲得



のために大社を訪れた俳人の資料から、江戸時代の大社や周辺地域の俳諧事情についても触れられた。

このほか、大名の俳諧紀行、明治時代の実業家の俳諧紀行など、身分や立場によつて生まれる独特の世界観や視点を持った俳諧紀行も紹介され、文学的な面だけでなく、俳人達の価値観や人間関係といった背景を知る事で、俳諧紀行はより面白く、多彩な資料となる、ということも知る事ができた。

種類	ワークショップ	ワークショップ	連続講座
タイトル	大社 能を知る集い ～能と神楽～	初夏の茶懐石	古典への招待 ～和歌を中心に～
参加人数	27	31	114 (延べ)
回答枚数	23	25	15
Q1. どのようにして今日のイベント・ワークショップを知りましたか？			
チラシ	15	1	2
ウェブサイト	0	3	0
友人から	3	8	0
関係者の紹介	8	12	13
Facebook	1	1	0
その他	1 (ツイッター)	1 (情報誌)	0
Q2. イベント・ワークショップはいかがでしたか？			
とても良かった	19	23	12
良かった	4	1	3
どちらとも言えない	0	0	0
良くなかった	0	0	0
無回答	1	0	0
Q3. 本日の内容は理解しやすかったですか？			
よく理解できた	17	15	6
おおむね理解できた	4	7	9
どちらともいえない	0	1	0
一部理解できなかった	2	0	0
理解できなかった	0	0	0
Q4. 感想をお聞かせ下さい			
	能や狂言は難しいイメージを持っていたが、分かりやすく楽しい話で興味を持った 講師の方達の熱意が感じられて感動した 身体を通して体感して学ぶところ楽しい 一緒に声を出して面白かった プロの声や音を身近に感じられる距離感が良かった 日本人の根元的な話から、今後の考え方の幅が広がった	薄味でも、食べるうちに丁度良くなり満足した 器がきれいで料理をひき立てていて、気持ちよくおいしく食べられた 漆器を使いたくなった 鮎の風干と蓼酢、いり酒が参考になった。活用したい 調理、盛りつけなど懐石料理の作り方を間近で見ながら教わり貴重な体験になった 料理と時代背景についての話	楽しかった 古典がこんなに楽しいと、再認識した 久しぶりに「学ぶ」時間を持つ事が出来た 宿題があって予習復習が出来て嬉しかった
Q5. 今後の企画についてご意見・ご提案などお聞かせください			
	連続して開催して欲しい 続きをしてほしい また参加したい（土日に開催して欲しい） 能・狂言や漢字の話をもっと聞きたい 日本文化に関する事	次回も参加したい 料理、音楽など日本の伝統文化に関する事 茶事	講座について もっと専門的な内容を；0人 同じ程度の内容；13人 もう少し分かりやすい内容；1人 テーマについて くずし字を読む練習をもっとしたい；8人 作品内容について深く知りたい；7人

種類	連続講演会 (第一回)	連続講演会 (第2回)	連続講演会 (第三回)
タイトル	不昧流茶室を巡る近代 数寄者の普請道楽	大社参詣と札所巡り	俳人の紀行
参加人数	60	24	17
回答枚数	48	18	9
Q1. どのようにして今日のイベント・ワークショップを知りましたか？			
チラシ	7	5	5
ウェブサイト	0	0	1
友人から	13	1	1
関係者の紹介	26	8	1
Facebook	1	0	1
その他	0	4 (町内放送)	1 (新聞イベント欄)
Q2. イベント・ワークショップはいかがでしたか？			
とても良かった	20	11	5
良かった	22	6	4
どちらとも言えない	1	0	0
良くなかった		0	0
無回答		1	0
Q3. 本日の内容は理解しやすかったですか？			
よく理解できた	8	6	4
おおむね理解できた	34	9	5
どちらともいえない	2	1	0
一部理解できなかった	4	2	0
理解できなかった	0	0	0
Q4. 感想をお聞かせ下さい			
	分かりやすく面白かった 茶室は皆同じような作りだと思っていたが、色々な様式があることがわかった 茶室の見方が変わると思う 沢山の茶室についてスライドを見ながら説明が聞けて良かった 近代数寄者の活動について改めて関心を持った 不昧についての話をもう少し聞きたかった	当時の旅の様子がよく分かっておもしろかった 人の考える事は昔も今も余り変わらないのだと興味深かった わかりやすかった 図を見るのが楽しくなりそう	充実した時間で、学びの大切さを感じた 「おくのほそ道」くらいしか知らなかったのが勉強になった 「俳諧紀行」にも様々なあるのだと分かった。読んでみたい 出雲大社の存在が、様々な文化人の訪れを促したと感じた 俳諧は敷居が高いと思っていたが、身近に感じられる
Q5. 今後の企画についてご意見・ご提案などお聞かせください			
	茶室見学ツアー 次回も参加したい 伝統文化と現代美術を組み合わせたいもの お茶に関する事	古文書を読む会 昔の生活を知る事の出来るような話を聴く会 続きが聴きたい	今回は「旅」がテーマだったが、「句集」「連句」などのテーマでも講演を聴きたい 引き続き、旅行に関する話を聴きたい

《館外展示》

プロジェクトの成果を広く公開すること、他機関との連携を深めていくことを目的とした、出張展示

■江戸力く献立いろいろく

期間 六月三日く二十五日

会場 島根大学附属図書館展示室

所蔵する文書に記された様々な献立と、用いられた食器などを展示。

冠婚葬祭をはじめとした私的なもてなしで出された献立や御用宿で出した食事の献立が記された『萬日記』や綴り、松江藩主松平治郷(号、不昧)の茶会記、他藩で出された伊能忠敬への献立を調べた記録などの文書資料と、それらの献立に記されている本膳、二の膳、三の膳や長鍋など独特の器、茶会で用いる懷石膳などを展示した。(作品数 二十五点)



アンケートに記されたコメントを抜粋する。

〈印象に残った展示〉

実際の書物、使われていた道具

献立記録

江戸時代の椀物などがとてもきれいだっただこと

伊能忠敬を迎えるにあたって他藩の献立を調べている様子

実際に作られた料理の写真から文字だけでは想像しきれないところがカバードきた。

古文書は読めないが、器や道具は興味深かった

〈コメントと感想〉

実際の書物があり、それに感動した

全部に訳をつけてほしい

江戸を身近に感じた

昔の食文化に興味があるのでとても面白かった

学芸員の方が常時いてくださるとありがたい

解説をパンフレットとして発行してほしい

普段なかなか見れないものなので見れて良かった

献立の再現写真がもつとあるといい

またやつてほしい

松江の文化に触れられ、良かった

文書に記されている心配りや人々のやりとりを実際に読んで体感したいので、解説など、読み解くためのものがかりがもつと欲しかった

もつと企画の広報をしたほうがいい

料理ワークショップは松江で開いても良いのでは



■手銭家資料と大社の芸能

期間 九月二十日～十月十六日

会場 島根県立古代出雲歴史博物館

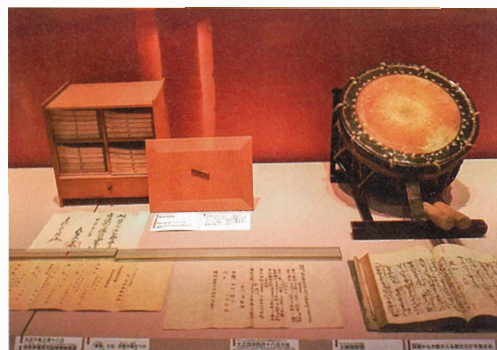
館常設展示室展示ケース

神迎えの道の傍らにある大土地神社は、長く受け継がれて国の無形文化財にも指定されている大土地神楽が有名で、毎年おこなわれる秋の例大祭では、夜神楽が上演される。

手銭家は大土地神社に隣接し、神社に深く関わってきたこともあり、神社や神楽に関する文書や、五代当主官三郎が寛政十年（一七九八）に献納し実際に使われていた二面の神楽面、「山の神」「すさのを」を所蔵している。

また、蔵書調査によって、能楽関連資料、浄瑠璃本、地唄本、鼓、太鼓など、神楽以外にも様々な、芸能に関わる資料が伝わっていることが分かってきた。

大土地神社の秋の例大祭と同時期に開催した今回の展示では、手銭家に伝わる芸能関係資料から、大社の地にしっかりと根付き、繁っていた文化の豊かさを紹介したいと考えた。これらの資料からは、中村・大土地両村の氏子らが大土地神楽を守り伝える為に重ねてきた努力とともに、江戸時代の大社の人々が様々な芸能を楽しみ、熱心に学んでいた様子もうかがえる。（作品数 二十三点）



《平成二十九年企画展》

■ 黒と彩

墨色を楽しむ、色彩を味わう

四月一日～七月三日 (三〇点)

墨の濃淡が表現する豊かな色 彩色画の華やかさとはかなさ
大きな画面が見せる空間 フレームによって切り取られた空間
など、水墨画と彩色画、屏風と掛け物という二種類の視点で、作品を対
比しながら楽しんでいただこうという企画展。
前期は水墨の屏風と彩色の掛け物、後期は彩色の屏風と水墨の掛け
物という組み合わせで展示した。

【主な展示作品】

四季山水図押絵貼屏風(曾我蕭白)
漁村松図屏風(長谷川玉峰)、
蜀栈道図屏風(古市金峨)
金地源氏物語図屏風(土佐派)
白鷹紅楓図(松平綱隆)
修紫田舎源氏(月岡芳年)
下邳後約図(中西耕石)
高尾太夫図(宮川長春)
仙人図(八田古秀)
波上躍鯉図(円山応挙)
石曳猿図(松花堂昭乗)
柘榴寿帯鳥図(藝愛)
松間明月図(大原吞舟)
など



■憧れの陶磁器

真似る、写す、越える

七月二十六日～九月二十五日 (七十二点)

外国からもたらされる舶来物はどの時代でも特別であり、どの時代にも憧れの器物があった。

海外からもたらされた舶来の陶磁器は、それぞれの時代の文化を担っていた人々に珍重され、真似たり写した作品、次に、このような舶来品に触発され、独自の工夫や表現の加わった作品、新たな技法による作品が生みだされていく。

企画展では、舶来の陶磁器と国産の作品を共に展示し、作る人、使う人が舶来の品々に感じた喜びや楽しさ、オリジナリティを越えようとする人々のたゆまぬ努力を感じていただくと同時に、このような作品を楽しむ文化力が当地にもあり、作品も伝来してきた事を、広く知っていただけばと考えた。

【主な作品】

十錦手皿(清)

青磁夕端山花入写し(土屋雲善)

古染付芙蓉手鉢(明時代)

芙蓉手水禽図鉢(伊万里)

古刷毛目三島茶碗(高麗)

和蘭陀写蒼花文茶碗(京焼)

ウイロウ・パターン絵皿(イギリス)

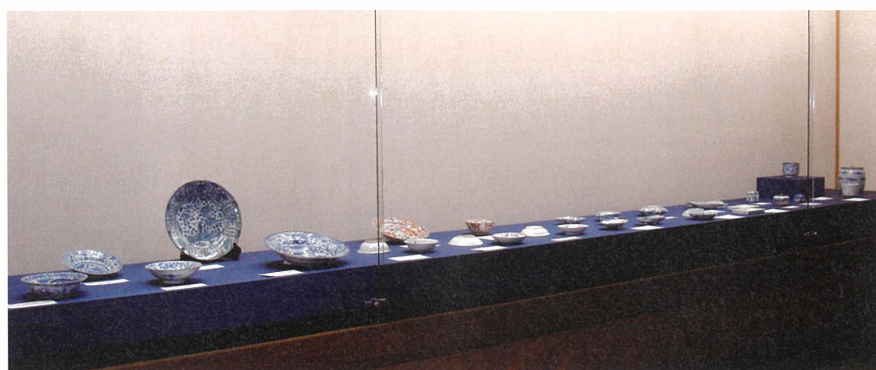
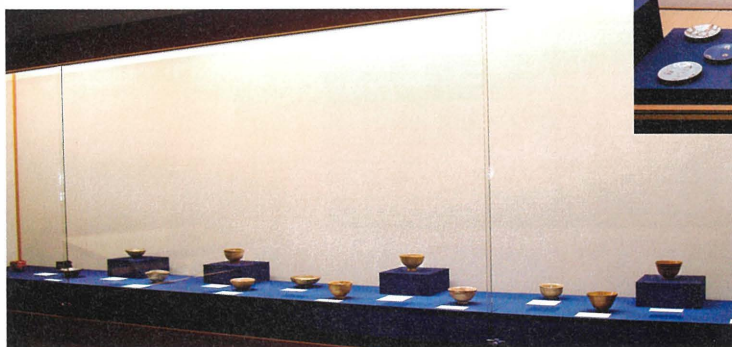
茶壺(呂宋)

織部洲浜形茶碗



染付氷梅文水指(久村焼)
古染付寄向付(明)

など



■茶の湯の愉しみ

真行草ってどんなもの？

十月七日～十二月二十四日（九十八点）

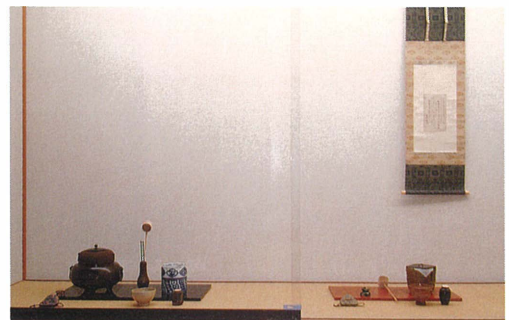
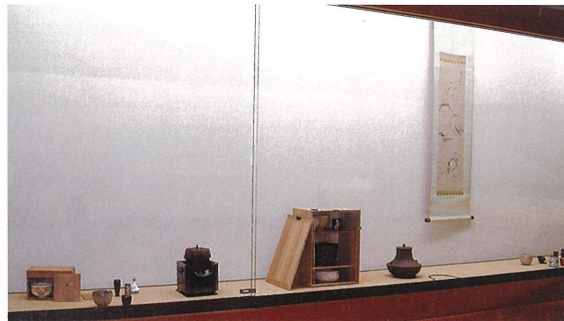
七回目となる、茶の湯の企画展「茶の湯の愉しみ」。

今回は、茶の湯でよく使われる「真・行・草」という言葉に注目し、台子、長板、茶箱など何組かの道具組を行った。

また、点前の格や場によって使い分けられる、様々な花入や香合を展示した。

【主な展示作品】

真台子 真の点前
 爪紅及台子 草の行点前
 炉長板 行の草濃茶点前
 風炉長板 行の行濃茶点前
 薄茶小板点前
 梨子地富士三保松原蒔絵茶箱
 旅簞笥（堀越精峰）
 「流水香」（西田幾多郎）
 力圍希棗（春斎 吸江斎文字入り）
 粉溜秋野蒔絵棗（四代小島漆壺斎）
 唐物尻膨茶入
 虫図香合（玉楮象谷）
 赤楽茶碗（楽左入）
 菊絵茶碗（高橋道八）
 竹釣船花入（有澤宗滴）
 七官耳付青磁花入
 桐秋草文野点箱 など



■出雲今昔Ⅱ〈萬日記から見る江戸時代〉

江戸時代の旅事情―さの子さんの旅―

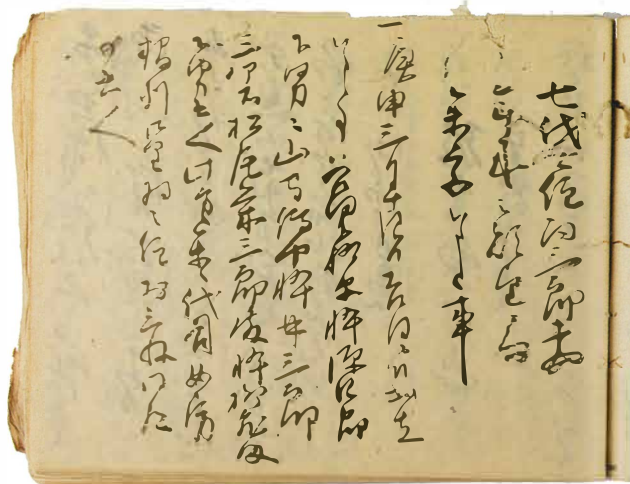
平成三〇年一月十日～三月十一日（三十七点）

安政七年（一八六〇）の春、手銭さの子は、長年の念願であった伊勢・上方への旅へ出かけた。六十日に及ぶこの旅にあたっては、許可を得るための根回しなど、江戸時代ならではの苦労が『萬日記』に記されているが、近年、この旅行の為の行程表や旅の心得、さの子が持ち帰ったガイドブックや土産品なども見つかった。

企画展では、さの子の旅に関するこれらの資料の他、手銭家に宿泊した伊能忠敬に関する資料など大社を訪れた人々に関する記録、江戸時代に出版された名所図会や紀行文といった、旅を巡るあれこれを展示した。

【主な展示作品】

- 萬日記六番、八番、九番
- 乗鶴仙人図（風外本高）
- 華岳僊樹下囲碁図（池大雅）
- 蘭竹自面讃図（貫名海屋）
- 嵐山梅尾図（古市金峨）
- 蝦蟇仙人図（帛洲）
- 手銭さの子旅行関連資料
- 参宮大和巡道中手引
- 浪花講定宿帳
- 大和巡りひとり案内他
- 伊能忠敬関連資料
- 京都順覧記
- 江戸砂子



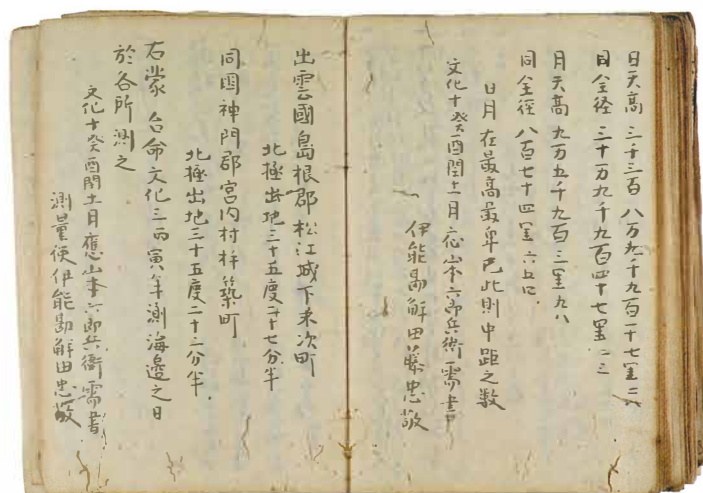
東国名勝誌

都林泉名勝図会

おくのほそ道

陸奥衛

など



総括

平成二十九年年度事業について総括する。

手銭家所蔵資料を活用したアウトリーチ事業として、四つのワークショップ、連続講座、連続講演会、館外展示、企画展をおこなった。

継続して実施している「古典への招待」、「料理再現ワークショップ」は、今回の参加者からも継続希望の声をいただいております、来年度も内容を充実させながら続けていくべきだと考える。特に「料理再現ワークショップ」については、過去の実施状況や取り組み方、今後の予定などについてさまざまな問い合わせが増えており、他機関と共同した新しい事業展開も考えられる。

これまで平日の午後に開催していた「大社 能を知る集い」だが、今回は開始日時を土曜日の午後に設定してみたところ、参加者の年齢層も地域も広がった。来年度も時間帯などを考えながら継続したい。このような配慮は他の事業でも有効だと思われる。

大社町内すべての小学校でおこなったワークショップ「能と狂言を体験してみよう！」はこれまで能、狂言、囃子方の三名に講師をお願いしていたが、昨年講師の方達から、時間的な制約があつて予定していた内容を全て盛り込めないという意見が出たことから、今回はお二人でおこなっていた。先生方の評価も高く、今後、学校とより緊密な関係を持ち、話し合いをおこないながら考えていきたい。

島根大学附属図書館、島根県立古代出雲歴史博物館での館外展示も継続事業である。当初は、記念館でおこなった展示を抜粋するという内容だったが、次第に調査研究を反映させた独自の展示や、記念館での展示を発展させた内容になってきており、調査・展示・成果発信の繋がりを実感している。

今年初めておこなった「器を直そうー金継ぎ教室」は、「次回はいつなのか」という声を多数いただいた。作業は梅雨から初秋にかけての季節が適しているが、今年度の反省点を修正し、しっかりと準備をすることができそうかどうかによるだろう。

連続講演会は、企画展と連動したテーマでお話いただいたことで、展示資

料に関して、より専門的な情報や視点を提供することができ、地域の歴史や文化、所蔵資料についての興味や意識を喚起することにも繋がったことが、アンケートなどからもうかがわれる。来年度以降も、企画展と関連づけたこのような講演会を続けたい。

どのイベントについても、「知らなかった」「参加しなかった」などと後から言われる事が大変多く、なんとも悩ましい。効率よく広範囲に拡散できるような広報活動の工夫が不可欠である。

アウトリーチ活動については充実した成果があつたと言える一方で、平成二十八年年度に二年かけておこなうとした「江戸時代から続く松江藩を支えた旧家ミュージアムの国際発信のための環境整備事業」は、今年度の申請が通らず、進める事が出来なかつた。昨年の取材では大変面白いお話を聞くことが出来、様々な展開も可能だと考えていたので、企画自体が無駄になるのはあまりにもつたいなく、新たな連携や発展をもたらすような方法がないものか考えている。

所蔵資料については、今年度も個別の活動として調査研究を進めた。

文芸関係資料については各資料の解説、翻刻、研究も蓄積されており、これらの成果をどのような形で発信していくかが、今後の課題である。また、調査研究と平行して、資料の整理を進め、より効率よく活用していくための環境を整える必要がある。その他の文書資料については、整理が進まず、なかなか内容を把握するまで至っていない。

平成二十七年年度に『萬日記』をデジタル化した事で、平成二十八年年度には『萬日記』目次解説をおこなう事が出来た。今年度、二回の館外展示、企画展「出雲今昔」が出来たのは、目次作成によって『萬日記』の内容把握が容易になり、関連する記述を取り上げる事が可能になったからである。

このように、所蔵する文書資料を活用するためには整理を進め内容を把握することが必要だが、先ずは様々な資料のデジタル化が必須である。

今回のアウトリーチ活動での手応えと反省点を活かして来年度以降の活動につなげていくとともに、他機関と連携した広がりのある活動の展開、および調査研究と資料のデジタル化も続けていきたいと考えている。

手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業

—平成29年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書—

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

会 長	手銭 白三郎	公益財団法人 手銭記念館	理事長
副会長	杉江 実郎	国立大学法人島根大学	附属図書館長
副会長	田坂 郁夫	国立大学法人島根大学	法文学部山陰研究センター長（法文学部教授）
理 事	要木 純一	国立大学法人島根大学	法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト研究員（法文学部教授）
理 事	田中 則雄	国立大学法人島根大学	法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト研究員（法文学部教授）
監 事	舟本 幸福	国立大学法人島根大学	附属図書館 図書情報課長
事務局長	手銭 裕子	公益財団法人 手銭記念館	事務局長
事務局員	佐々木 杏里	公益財団法人 手銭記念館	学芸員
事務局員	昌子 喜信	国立大学法人島根大学	附属図書館 情報サービスグループ・リーダー

二〇一八年三月三十一日発行

編 集：出雲文化活用プロジェクト

編集補助：連和加子（TEZEN）

総括文責：佐々木杏里（手銭記念館学芸員）

発 行：公益財団法人手銭記念館

〒六九九一〇七五一島根県出雲市大社町杵築西二四五〇一

TEL/FAX：〇八五三一五三一二〇〇〇

主催:出雲文化活用プロジェクト

公益財団法人手銭記念館 / 島根大学法文学部山陰研究センター / 島根大学附属図書館

助成:平成 29 年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業